

情報の創造・交流活動を基盤にした情報教育
—コンピュータとインターネットの教育利用—

茨城県水海道市立菅原小学校

倉持 勝美

はじめに

本稿は、「マルチメディア¹⁾・コンピュータ」と、児童中心主義教育の一つである「フレネ教育思想」²⁾の知見を活用した情報教育について述べるものである。

資本主義社会における情報化／消費化の急速な進展は、我々に物質的に恵まれた生活をもたらす一方で、環境問題、資源枯渇問題、南北貧困問題等の地球規模の課題を突きつけている。しかし、これらの諸問題解決の糸口もまた「情報化」にあると言うことも否定できない事実である。今日における、情報処理技術の飛躍的な進歩は、我々人類における「知」の在り方を根本的に変革しようとしている。現在、それらの情報環境を文化の発展に生かす資質として「生きる力」³⁾が注目されているのである。

今後の学校教育において、「生きる力」を育成しようとするなら、まず真正な文化実践としての学びを実現する必要がある。なぜなら、今日における学校教育においては、子どもたちの「学び」が疎外されてしまう傾向がみられるからである。そこで、本研究では「真正な学び」を実現するためにフレネ教育の知見を活かした教育実践を試みた。また、子どもたちの「学び」の活動において、マルチメディア・コンピュータを中核とした情報機器を積極的に活用した。

I 理論編

1. 社会の高度情報化と人間に必要とされる資質

濱口恵俊は、高度情報化社会を「『情報』によって生活上必要なくモノを生産し、流通させ、消費する過程がうまく制御される、その度合いが強まった社会」⁴⁾としている。間違いなく、今日の社会は、産業や経済を筆頭に、社会のあらゆる分野で高度な情報化が進んでおり、我々は、その恩恵である豊富な商品やサービスを消費しつつ、物質的に満ち足りた生活を送っている。

反面、人類がそれらの生活を享受する代償として、公害問題、資源枯渇に関する問題、貧困問題等、深刻な世界的課題が続出している。一般的に言って、これらの問題の病巣は資本主義社会の外側か外縁に偏在している。つまり、我々の生活は、資本主義社会における恩恵を直接享受することのない人たちの生活を脅かすことに直結しているのである。

見田宗介は、前述した諸問題克服に向けた情報化として、社会全体の動きを認識するための情報化と、設計の効率化による費用や資源の節約を提言している。⁵⁾情報は、多くの人々に公開される

ことで内容が精練されたり付加価値を与えられて成長していく。インターネットは「情報の共有化」をめざして発展してきたメディアであるが、それは人類における「知」の在り方を変質させてしまう可能性を秘めている。インターネットの世界的な普及によって「メディア革命」が起きつつあるのである。

人間が情報化／消費化の進展とそれにとまらぬ限界問題に対抗するためには、里見実の言うように、一人ひとりが「見えない世界を見る力」⁶⁾をもつ必要がある。なぜなら、「無駄な物資を大量に消費する生活は、資源の枯渇や環境破壊に結びついている」ことを読みとることが、問題解決のための行動をうながす前提になるからである。また、赤木昭夫はネットワーク社会における様相をカオス現象としてとらえた上で、「我々人間が、その不規則な変動を創造や進化に生かすための、非線形現象に対するセンスをもつ必要がある」⁷⁾と主張している。今後の社会においては、ディス・コンストラクションを創造の糧とし、ネットワーク社会におけるカオスを創造の温床と利用し得る資質が求められているのである。

2. 今後における情報教育の在り方

市川伸一は、情報教育を「自らのもっている問題を解決するために情報をいかに扱うか、情報をもとにしていかに考えるかを教えること」⁸⁾と定義づけている。市川の言うように、学ぶ過程において情報を駆使していく能力こそが、本来の意味においての情報活用能力とは言えないだろうか。いずれにしても、人間が学ぶことと情報教育とは不可分の関係にありそうである。

義務教育段階においては、特定のコンピュータ言語やソフトウェアの操作技術の習得自体を目標とした情報教育は、さほど重要とは言えないであろう。なぜなら、コンピュータ関連の知識や技術が急激に陳腐化するからであり、専門的な知識がなくても利用できるようなコンピュータが、出現しつつあるからである。

水越敏行は、通信系のマルチメディアが教育にもたらす変化として、次の2点を指している。⁹⁾それは、「受容学習から発信学習への変化」と「閉じた学校・学級から、開かれた学級・学校への変化」である。自分が調べた事柄や作品を公開したり、異なる地域の人たちと交換することは、新しい価値を見いだしたり、自分たちの文化を再発見するための契機となるであろう。

また、黒田卓はインターネットの教育利用に関して、コミュニケーション的活用とデータベース的活用を提案している。¹⁰⁾つまり、インターネットには、電子メールやニュース・グループで多くの人たちとコミュニケーションを図ったり、WWW上に存在するデータを学習に利用したりというように、教育用メディアとして優れた特質を備えているのである。

3 フレネ教育思想とその情報教育的側面

フレネ教育とは、セレスタン・フレネの教育思想に基づいた児童中心主義教育の立場による教育実践の総称である。フレネ教育には、それを特徴づけている「自由作文」「アルバム作成」「学校間通信」がある。それらの活動は、あくまで「子どもたちの学びたいという意志」を尊重した上で進められる。例えば、「自由作文」は、その名のとおりいつでも自由に書くことのできる作文であり、「アルバム」は、子どもたちの発意に基づいた調べ学習をまとめた冊子を指している。「学校間通信」は、他の学校と相互に「自由作文」や「アルバム」の作品や地元の特産物を交換し、文化

の交流を図ろうとする活動である。

フレネ教育を特徴づける自由作文は、発表する子ども、それを聞く子どもの区別なく、それぞれにアイデンティティを確立していく活動である。さらに、フレネ教育における自由作文、アルバム作り、学校間通信は、それぞれが孤立した活動ではなく、絶え間なく続けられる学びの活動において有機的に関連している。フレネ教育は、前節で述べた学びの特質を充分満たしている優れた教育実践である。

里見実が「フレネ教育における学校印刷は、伝達のメディアとして存在した活字を対話のメディアへと変革した。」¹⁰⁾と指摘しているように、フレネの教育実践は「学校教育におけるメディア革命」であった。自由作文にかぎらず子どもたちの作る作品はすべて、誰かに見て欲しいという願いが込められている。だから、色、材質、体裁、表現等にその子どもなりのいろいろな工夫を施すのである。これら一連の活動は実践的な情報教育と言える。

II 実践編

1 研究を進めるにあたっての準備体制の構築

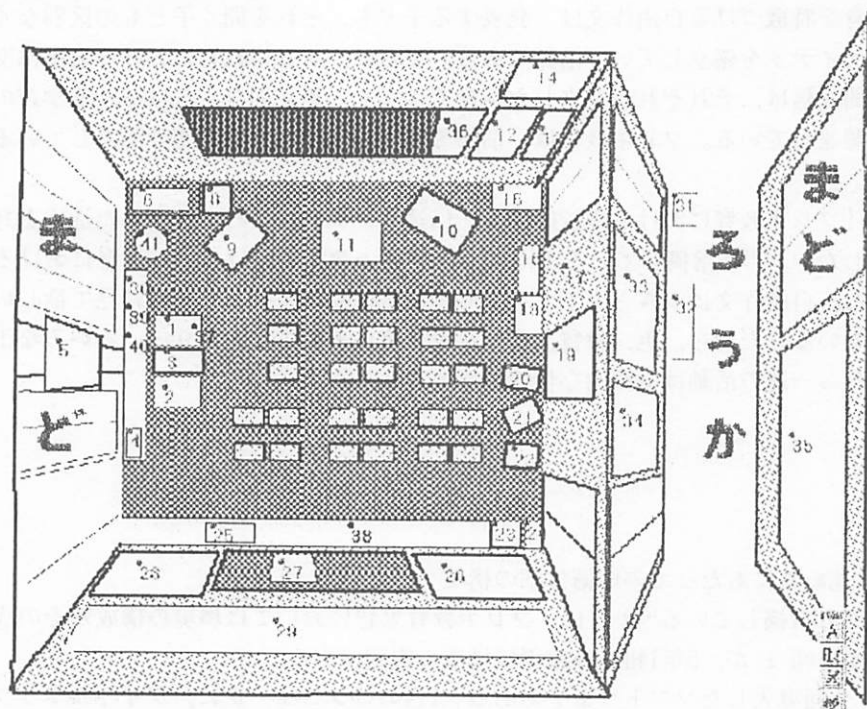
田中仁一郎も指摘している¹²⁾ように、フレネ教育思想においては環境の構成がその成否に大きく影響を及ぼす。図1が、5年1組の教室環境構成の実態である。

表1が、今回導入したソフトウェアである。1台のコンピュータに、ダイヤルアップ接続によるインターネット利用環境を構築した。コンピュータは、朝から放課後まで電源を入れたままにしておき、いつでも自由に利用できるようにした。インターネットに関しても、制限せずに自由に利用してよいことにした。また、子どもたちがインターネットを利用する窓口としてホームページを作成した。

表1 菅原小学校5年1組におけるソフトウェア導入状況

ソフトウェア名	メーカー	種別	備考
1 キッドピクス	INTERPROG	ドローイング	子ども向けマルチメディアお絵かきソフト
2 Creative Writer 2	Microsoft	ワープロ	子ども向けマルチメディアワープロ
3 Encarta97Encyclopedia	Microsoft	辞典	マルチメディア百科事典
4 Encarta World Atlas	Microsoft	辞典	マルチメディア世界地図
5 Bookshelf	Microsoft	辞典	マルチメディア国語辞典
6 ガラハコス	アスキー	図鑑	ガラハコスに関するマルチメディア図鑑
7 算数プラスター	Davidson	ドリル	算数の計算ドリルソフト
8 Netscape Navigator	Netscape	ブラウザ	WWWブラウザ(閲覧用ソフト)
9 Eudora	クニリサーチ	電子メール	電子メールソフトウェア
10 一太郎Ver8	JUSTSYSTEM	ワープロ	ビジネス・ワープロソフト
11 Word97	Microsoft	ワープロ	ビジネス・ワープロソフト
12 Excel97	Microsoft	表計算	ビジネス・表計算ソフト
13 PowerPoint97	Microsoft	プレゼンテーション	プレゼンテーション用ソフト

図 1 本実践における教室環境



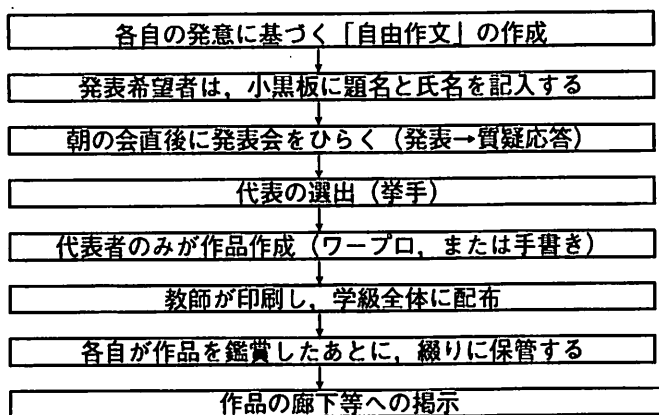
- | | | | |
|-------------------------|-----------------|-----------------|---------------|
| 1 コンピュータNo1 | 2 コンピュータNo2 | 3 共同利用整理棚 | 4 共同利用文房具 |
| 5 日本地図 | 6 「学校間通信」用作品箱 | 7 各種画用紙・色画用紙類 | 8 ラミネート用機器 |
| 9 テレビ(キャスター付) | 10 ゴミ箱大 | 11 演台 | |
| 12 「自由作文」タイトル記入用ホワイトボード | 13 日直 | 14 日課表 | 15 配膳台 |
| 16 金魚・メダカ | 17 「自由研究」発表予定表 | 18 共同利用食器棚・絵の具類 | |
| 19 給食コーナー | 20 個人用整理棚No1 | 21 個人用整理棚No2 | 22 個人用整理棚No3 |
| 23 掃除用具ロッカー | 24 ゴミ箱小 | 25 共同利用図鑑類 | 26 個人のコーナーNo1 |
| 27 背面黒板(行事等) | 28 個人のコーナーNo2 | 29 習字の常設掲示板 | |
| 30 共同利用棚・グローブ・習字用具 | 31 コンピュータNo3 | 32 アルバム収納ケース | |
| 33 多目的掲示板・電子メール・コーナー | 34 「自由作文」掲示板No1 | | |
| 35 「自由作文」掲示板No2 | 36 係り分担(磁石) | 37 地球儀 | 38 子ども用ロッカー |
| 39 レンズ付きフィルム | 40 ビデオカメラ | 41 ごみ箱大 | |

図 2 は、本研究を実践するにあたって作成した日課表である。火曜日と土曜日の1校時及び2校時(★印)を、フレネ教育実践としての自由研究や自由学習の活動時間とした。図 3 は、自由作文活動の流れである。家族と一緒に旅行に行ったこと、下校途中に起きた事件、家で遊んだこと等々を、数行の文章と絵を織り交ぜながら自らの思いを綴っていく。作品をみんなの前で発表し、その後最も自分の興味を引いた作品に挙手するという方法でその日の代表作品を決定する。

図2 本実践における日課表

1997 5年1組					日課表				
水	木	金	土	土曜時間	時間	月	火		
朝の会 自由作文発表					8:15 ~ 8:30	全校朝会			
算数	国語	理科	大学模 (自由)	8:35 ~ 9:20	8:35 ~ 9:20	1	国語 大國語 (自由)		
国語	算数	理科	大書写 (自由)	9:25 ~ 10:10	9:25 ~ 10:10	2	算数 大國工 (自由)		
英問休憩 てんじん 10:25 ~ 11:10 帰りの会 11:10 ~ 11:25					10:40 ~ 11:25	3	体育 算数		
社会	家庭	算数	※ てんじんの時間 1週→学校の時間 3週→学校作業 ※ 全校朝会 1週→先生の話 2週→児童集会 3週→各種集会		11:30 ~ 12:15	4	道徳 社会		
社会	家庭	国語			12:15 ~ 13:00				
給食					13:00 ~ 13:30				
居休み					13:30 ~ 13:45				
掃除					13:50 ~ 14:35	5	理科 音楽		
体育	音楽	体育			14:35 ~ 14:50				
帰りの会					14:50 ~ 15:35	6	国工		
クラブ		1・1・自由 2・4・5・自由							

図3 菅原小学校5年1組における「自由作文」活動の流れ



自由研究活動は、その名の通り自らの設定した研究テーマを追求していく活動である。自由研究の時間内は、コンピュータやインターネット、カメラ、ビデオ等も自由に利用させ、図書室や校庭への移動やトイレに関しても制限を加えなかった。

自由学習は、教師の与えた学習課題を消化していくいわばドリル学習である。自由研究がすべてを子どもたちの発意に基づいた活動であるのに対して、自由学習の内容は教師によって規定される。

学校間通信は地域の異なる学校どうしの文化交流活動である。電子メールと学習成果物の組み合

わせによって何通りかの学校間通信を実施した。水海道市立絹西小学校と鹿島市立中野東小学校とは電子メールのみの交流，熊本県阿蘇郡波野村立遊雀小学校と東京都保谷市立保谷第二小学校(フレネ教育実践家:田中仁一郎の学級)とは電子メールと学習成果物の双方の交流を行った。埼玉県川越市立上戸小学校(フレネ教育実践家:岸康裕の学級)とは学習成果物のみの交流を行った。

2 研究活動の実際とその情報教育的意義

(1) フレネ教育実践

「自由作文」に対しての子どもたちの関心は，それに対して投げかけられる質問の数に比例していた。つまり，関心が薄ければ誰も質問しないし，みんなの心をつかんだ発表に対しては質問が殺到した。

図4は，「自由作文」テーマを類別してグラフ化したものである。外周のグラフが，発表されたすべての「自由作文」の類別であり，内周が代表作品の類別である。4月から12月にかけて代表に選ばれた作品は，全部で99点であった。作品の傾向をみると，「自分の経験に照らし合わせて共感できる」内容や，その逆に「自分が体験したことのない事件や体験」が多かった。

図4 「自由作文」テーマの類別

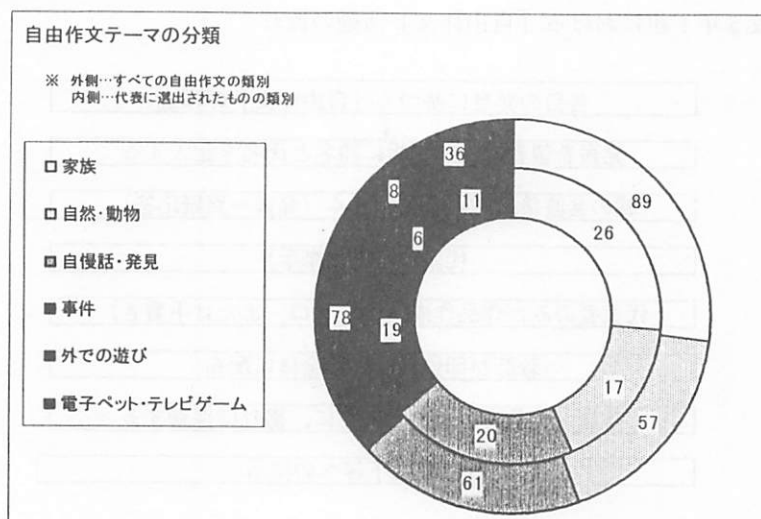
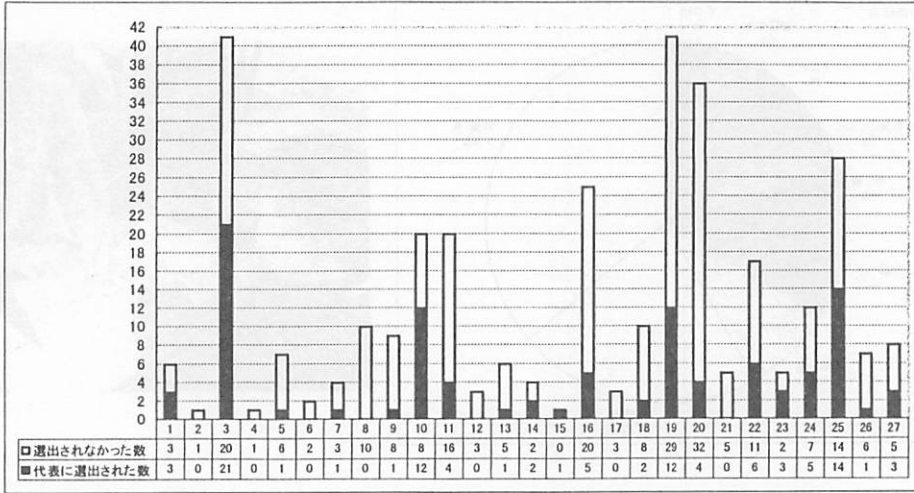


図5は，子どもごとに「自由作文」の発表，及び，選出回数を集計したグラフであるが，「自由作文」の発表回数の個人差は大きく，最も多い子どもが41回も発表しているのに対して最も少ない子どもは1回だけである。「自由作文」の発表を行っている子どもは，実質的には全体の約半数であることがわかる。

図5 子どもごとにみた「自由作文」活動



ぼくは、去年日光へ行きました。そこで見たのは、店の前に、あるおまんじゅうを、野生の猿が盗むところ、です。ぼくは、猿でも盗むんだなあと思いい車の中で大笑いをしました。



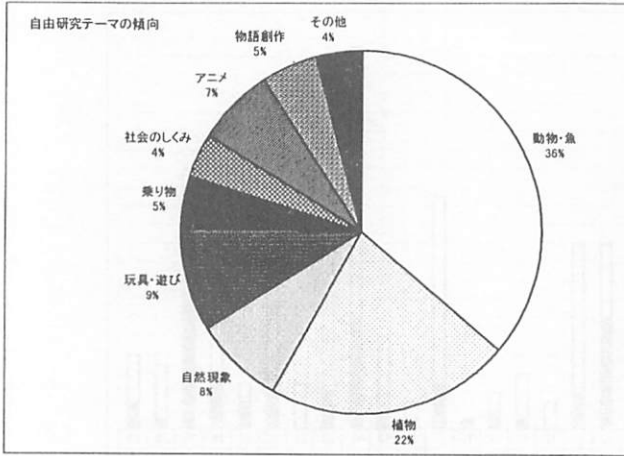
大木

次に、「自由研究」についてであるが、テーマとして最も多かったのが、動植物及び魚に関する内容であり、全体の58%を占めた。(図6)動植物や自然現象に次いで、子どもたちの研究テーマとなっていたのが、その時に子どもたちの間で流行している、遊びやアニメーションに関する内容であった。

彼らにとって、身近な存在だからこそもっと詳しく知りたいし、興味のある存在だからこそ追求せずにはいられないのである。この「もっと知りたいという強い欲求」が、研究活動における推進力であり、その思い入れが「情報収集」や「研究のまとめ」における工夫や努力を生むのである。

「自由研究」において子どもたちがまず頼った情報は「図書」による情報であった。(図7)本が、子どもにとって一番身近な情報源であるということ、何より、図書室に随時いてくれる司書の人が、子どもにとっての良き助言者となっていたこと等が、この結果をもたらしたと考えられる。また、インターネットにおけるWWWも子どもたちにとって貴重な情報源であることがわかる。

図 6 「自由研究」におけるテーマの類別



子どもたちが、研究をまとめる際に最も利用したメディアは紙であった。(図 8) 今回の実践では、いずれの研究成果も冊子の形にまとめたので、必然的に画用紙やラミネーター・フィルム等が必要になった。そのためもあって、両者が高い利用率を示したと言える。「自由研究」の成果を、製本用具の利用等によってきちんとした冊子に仕上げる作業は子どもたちの意欲を高揚させ、よりよいものを創造しようという原動力となっていた。

図 7 「自由研究」における情報収集手段

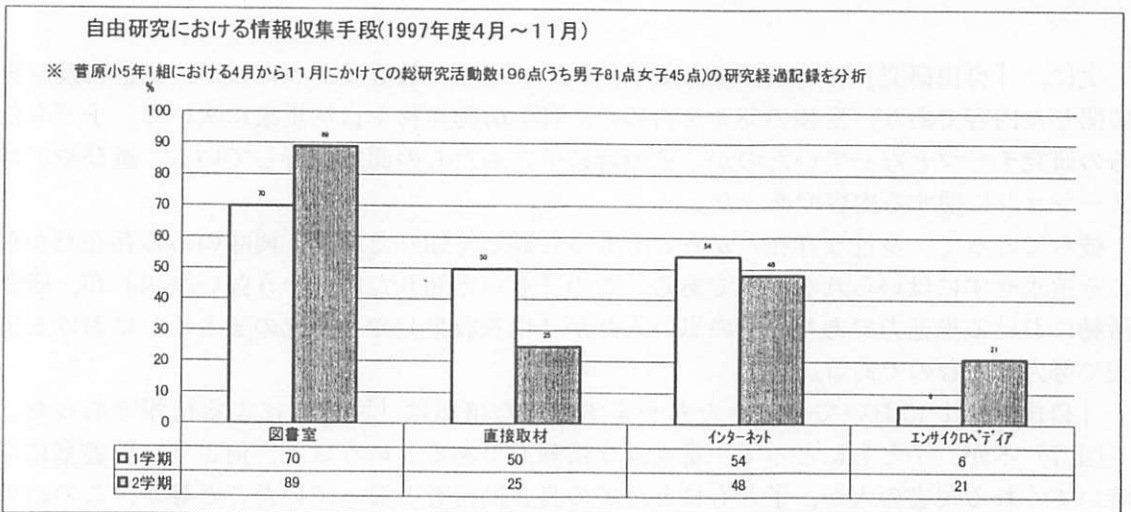
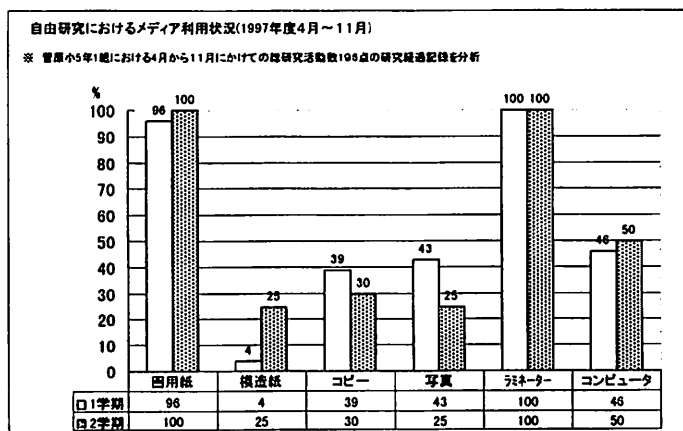


図8 「自由研究」におけるメディア利用状況

写真 アルバム裏の閲覧者名記入用紙



ところで、「自由研究」の結果をまとめたアルバムには閲覧者名を書くための表を貼付（写真参照）したが、それが子どもたちの研究意欲を高揚させたことが興味深かった。茨城大学助教授の新井孝喜が、「情報を受信する行為は情報発信することと等しい」と述べているように、アルバムをみるという行為は作成者にとっては、何より意義のある情報発信なのである。

今回の「自由研究」活動において、子どもたちは、興味の出発点を自分たちの生活の中に見いだしていた。それを追求することで、結果的に社会と自らの生活の結びつきを学んでいく。これこそ、フレネ教育思想も含めた「児童中心主義教育」における根本精神である。自らの生活や願いに直結しているだけに、子どもたちにとっては切実であり、必然的に研究の過程で様々な工夫を凝らす。このような理由から、児童中心主義教育を基盤にした情報教育実践は、「自らの切実な願いに裏打ちされた情報収集活動であり、表現活動であった」と言うことができるのである。

次に、「学校間通信」の実態と、その情報教育的な意義について考察する。

電子メールを軸においた交流先は、東京の保谷二小、鹿嶋市の中野東小、及び市内の絹西小の3校であった。ここでは、絹西小と保谷二小との交流活動について概観する。

絹西小とのメールによる交流活動をみると、当初はお互いの情報交換が不足しているせいか、話の核になるような事象がみつからない。相互にかみ合わない質問を繰り返し、話題に深まりがない。ところが、11月になって互いに共有できる関心事がみつかり、交流の内容に変化がみられた。お互いが参加する、水海道市内小中学校音楽祭に関する内容で交流が盛り上がり、そこから趣味に関する内容へと話題が発展していったのである。放課後遅くまで1ヶ月以上猛練習を続けてきただけに、彼らの音楽会に対する思いは特別であったのであろう。

保谷二小の田中学級（以下は、田中学級と呼ぶことにする）との交流は、教師相互が「学校間通信」を志向していただけに、他校とは異なった特別な意味合いをもっている。

もちろん、子どもたちはフレネ教育思想を意識して交流を進めたわけではないが、担任教師相互が、「電子メールによる学校間通信」を希求していたことは交流活動に大きく影響した。田中学級との交流活動は、最初に届いたメールの内容から他校とは違っていった。図9が、その電子メールである。（「自由作文」は、前もって菅原小から田中学級に送ったものである）

図9 田中学級から届いた最初のメールと「自由作文」

1997年10月16日の通信から

□ ○○君はいがいとおもしろい性格ですね。最後の方のツバメのクソダツペと言うところはクラスでも笑いました。私も友達に妖怪だとか言われます。と言うか私、△と言うのですが△は楽しいとか言われます。むちゃなことばっかするからかなあ。とにかく何かの機会があれば会おう。

接骨で、僕は、洋服に、ま
ちがえて、葉をつけたらお
じさんは、何その白いの
といったので、葉といった
のに、おじさんは、くそと
言いました。なんのくそ
と聞いたら、ツバメの
くそだつべよと言いました。
おもしろかったです。



まず、文章が口語体で書かれているために、まるで心を許した友達に宛てた手紙のような印象を受ける。自分を飾ろうとせずに、ありのままの姿を書こうという姿勢があり、実に自然な文章表現である。フレネ教育思想が日常化している学級の子どものらしい、生き生きとした文章である。それまで、電子メールの交流では心の交流は困難と考えていた。しかし、田中学級との交流でそれが変化した。Iで述べたように、「自由作文」は自らの生活を語る活動である。たとえ子どもたちは意識していなくても、双方の学校生活の基盤には「フレネ教育思想」が息づいていたのである。

熊本県波野村立遊雀小とは、「電子メール」及び「作品等の郵送」を利用した「学校間通信」を行った。菅原小と遊雀小の双方とも、最初のメールで互いの学級紹介を行っている。遊雀小のメール中の「漢字で文を作るのが上手いのは、・・」, 「足がはやい・・・」等の内容に、何人かの子どもたちが触発され、そこから一連の交流活動が始まった。それは、彼らの「こだわり」であった。例えば、表2の子どもたちの「こだわり」は絵を描くことであった。この子どもは、無口で友達もいない子どもである。休みの日には家で絵を描いたり、動物の世話をして過ごすことが多く、それだけに絵を描くことや小動物の世話をすることが好きで、それなりの自信も持っていた。だから、彼は、「絵を描くのが得意な遊雀小の○○さん」が気になって仕方がなかった。

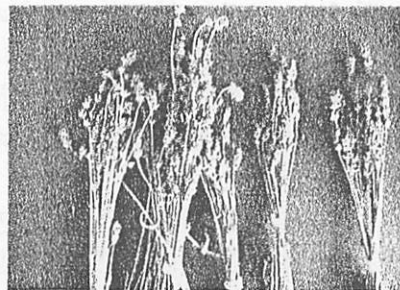


表3は、1997年の4月から12月末までに行った遊雀小との郵送による交流活動の一覧である。メールの交流と比べると著しく頻度が少ないが、子どもたちの感動の度合いは、メールの比ではなかった。何より、菅原小の子どもたちを興奮させたのが、7月19日の終了式の日遊雀小から届いた小包であった。中身は「そ

ばビスケット」, 「そばポップコーン」, 「ラベンダーのドライフラワー」, 「自己紹介の手紙」等々。小包を開けたとたん, 教室全体を包み込むようにラベンダーの香りが広がっていった。子どもたちは思わず歓声を上げたが, これはメールの交流における喜びとは, ひと味違った感動であった。それらの品々には, 「遊雀小の子どもたちの心」が込められているような実感が湧いてくる。

表2 「学校間通信」 対-遊雀小 より抜粋

0		月日	菅原小から	児童 ○E	手 段	方 向	児童 石部	遊雀小
1	A	7月 10日	<p>○○さんへ 私は、茨城県菅原小学校5年1組の○○○○です。○○さんはとても絵がうまいと聞いたのでびっくりしました。○○さんに聞きたいことがいっぱいあるけど書ききれません。さいしょに絵の話をお願いします。○○さんは何の絵がとくいなんですか、私は、猫の絵や女の子の絵がとくいです。こんど、猫の絵や女の子の絵を送れたらいいなと思っています。私のコレクションたまごっちは、「たらこっち」です。新種発見たまごっちは「くさっち」です。それでは、また手紙を送ります。これからよろしく御願います。※あとできれば電話番号もおしえてもらえたらうれしいと思います。私の家は、*****だよ。それじゃ、またね。</p>	○	E	→	石部	※ E…電子メール 〒…郵送
2	A	10月 7日	<p>○○さんへ 菅原小学校の○○○○です。私は、いまタマゴッチの物語を作っています。先生もとっても上手に作っているとほめてくれます。もし、完成したら○○さんにも見てもらいたいと思っています。私たちは運動会を終えて、先日の金曜日に写生会を行いました。○○さんは、今度何か行事がありますか。</p>	○	E	→	石部	
3	A	11月 8日		○	E	←	石部	<p>○○さんは、とっても絵がうまいですね。わたしはそんなにうまくありません。○○さんはポケモン(カメックス)のなにか好きですか。○○さんはサンダーやサンドとかいろいろポケモンの絵がとっても上手ですね。私は、全然うまくないけどマダツボミならまああかけます。○○さんは、ポケモンの本とか持っていますか?私のクラスでは、マダツボミが大好きな人がいます。それは、○○さんです。私も好きです。ほかに好きにポケモンがいます。今度また、ポケモンの絵をたくさん送って下さい。またおたよりをまっています。 バイバイ</p>

表 3 遊雀小との郵送による交流活動

	菅原小から遊雀小へ	遊雀小から菅原小へ
6月22日	遊雀小に「自由作文10点」, 「自己紹介のカード」, 「将門せんべいを郵送する」	
6月24日		担任の田辺先生からお礼の電話があった。
7月19日		遊雀小から小包が届く「写真付き自己紹ポップコーン」, 「そばビスケット」, 「波野村のパンフレット」等が入っていた
8月19日	遊雀小に対して, 礼状を送る	
10月22日	「自由作文」10数点, 絵や手紙などを郵送した	
11月6日	「自由作文」10数点, 絵や手紙などを郵送した	
12月22日		版画の作品10数点や各子ども宛ての手紙等が届く

埼玉県の上戸小とは、郵送のみの交流を行った。上戸小の子どもたちの手紙は、文章が楽しくかかれていますので子どもたちも驚いていた。普段は、電子メールのプリントアウトしたきれいな手紙ばかり見ているので、手書きの作品が逆に新鮮に思えた。なぜか、汚れさえも人間くさく思えてくるから不思議である。手書きの手紙や絵には、文章や絵以外の何かが込められているという印象を感じた事例である。

「学校間通信」の成果をまとめると、次のようなことが言える。まずメールについてであるが、相手と共有できる体験や趣味等の話題がみつかり、交流が活性化することがわかった。さらに、その話題が自分のこだわっているものなら、なおさら情報交流が活発になる。例えば、「ハムスターのことは、放っておけない」とか「絵を描くことなら自信がある」というように、自分にとって興味のある話題のときは、子どもたちの意気込みも違っていた。それに対して、主に文字情報に頼らざるを得ないメールは、初めのうちは自らの思いを伝えることはなかなか容易ではない。しかし、共有できる体験や趣味、特技等がみつかり、お互いの思いを伝え合うことに夢中になるようだ。いずれにしても、自らの思いを文章化するためには、それなりの語学力や文法の技量が必要であることがわかった。



(2) フレネ教育における情報機器活用の意義

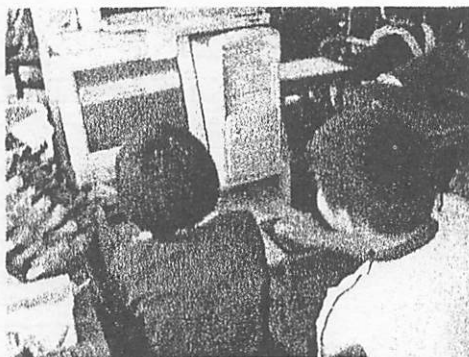
ここでは、フレネ教育活動において、コンピュータやインターネット等の情報機器を利用した意義について考察する。今回の実践で感じた、「フレネ教育におけるコンピュータ利用の意義」は、次の2つの点においてであった。ひとつは、その「清書マシン」的特質であり、もう一つが優れた「情報の保存・蓄積性」である。

子どもたちは、コンピュータに対して「字が汚くてもコンピュータがきれいにしてくれる」、「漢字を知らなくてもコンピュータが考えてくれる」と答えている。コンピュータ

の良さを本当に実感している彼らだからこそ、この見事な表現が生まれたのであろう。マルチメディア・コンピュータの良さは、何よりやり直しが容易であるという点にある。また、コンピュータは情報の保存・蓄積性に優れているため、一度入力した情報が多くの用途に利用できる点も、フレネ教育実践においては有効である。例えば、たった1枚のMOに、ある子ども6年間のすべての「自由作文」や「学校間通信」の記録、「自由研究」の成果等を記録しておくことが可能である。

次に、フレネ教育思想におけるインターネット利用の意義について考察する。インターネットにおける最大の功績は、「個人に対して地球規模の情報交流手段を提供したこと」に他ならない。今回の実践でいえば、それは電子メールによる「学校間通信」であり、WWWによる情報収集である。

インターネットは、「自由研究」を強力に支援する情報源として非常に有益であった。ホームページ上に作品を公開すると、学校外の一般の方から作品に対する感想が寄せられることがあるが、これなどはインターネットならではの良さと言えよう。



一般の方から送られてきた子どもの作品に対するコメント

Subject : どうも Date : Sat, 3 Jan 1998 04 : 02 : 00 + 0900

子供たちの作品を拝見させていただきました。今の子供たちってすごいですね。この子供たちが社会人になったとき私 (29歳) は彼らについていけるのか、ちょっと心配になりました。

「学校間通信」に電子メールを利用した意義は、情報交流の頻度を非常に高くできることと、情報交流の範囲をいくらでも拡大できたことにある。いったん電子メールを利用できる環境が用意できると、そのあとは1日のうちに何通でも手紙が送れる。電話のように迅速で、かつ手紙のように記録として残り、切手も封筒もいらぬ等、電子メールの魅力は尽きない。

(3) 情報教育におけるコンピュータ利用の在り方

本実践においては、子どもたちのコンピュータ利用の傾向を調べるために、6月23日から12月17日にかけて実態調査を行った。その調査方法としては、子どもたちがコンピュータを利用する際に、図10の記録用紙を記入してもらい、その結果を累積していくという方法を採用した。図11は、調査結果を集計したコンピュータ利用度数のグラフである。度数における大きな増減は、学校行事の影響を受けたためである。6週目から9週目までの急激な落ち込みは、運動会のための練習が影響しており、16週目から18週目までの落ち込みは、マラソン大会の練習のためである。調査対象となった日数は延べ96日間であ

り、その間に2台のコンピュータが述べ1686回利用された。つまり、1台が1日あたり約9回利用されたことになる。かなり高い頻度でコンピュータが利用されたことがわかる。

図 10 コンピュータ利用実態調査用 記録用紙

授業	昼休み	放課後
	算数アラビヤ	
自由研究	遊び	
電子メール受信	ドリル	

月 日

○ なまえ

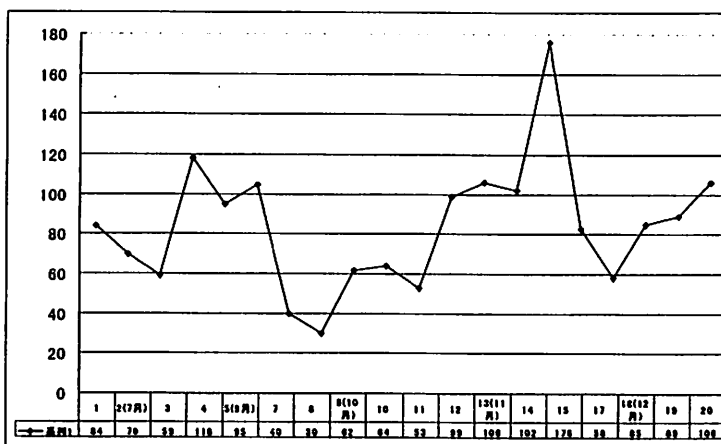
○ いっ

○ ソフト名

○ 目的

朝	業 前	自由研究
ワード	ワード	ワード
カシイ	電子メール	イカ
自由作文	電子メール作成	
授業に使う	個人的に調べたこと	

図 11 週単位でみたコンピュータ利用度数の変化



目的別にみると「電子メール」関係の割合が最も多く、作成と着信確認を合わせて全体の42%を占めている。(図12)なお、電子メールの交流相手は、田中学級の場合がほとんどであり、田中学級との交流が非常に活発であったことがわかる。コンピュータ利用の85%が休み時間や放課後、そして、朝の始業前の時間に集中している。(図13)中でも、業間休みと昼休みに利用される割合が最も多く、合わせて全体の57%を占めている。子どもたちの生活の場である教室に設置したことが、この結果をもたらしたと考えられる。

また、今回の実践では、廊下に設置したコンピュータを囲みながら、異学年の子どもたちの交流が実現できたことも印象深かった。ソフトウェアの操作を教え合ったり、少ない機器を共同で利用しながら1枚の絵を創作したりという作業は、異学年の子どもどうしの得難い交流活動の場であった。

図 12 コンピュータ利用の目的別割合

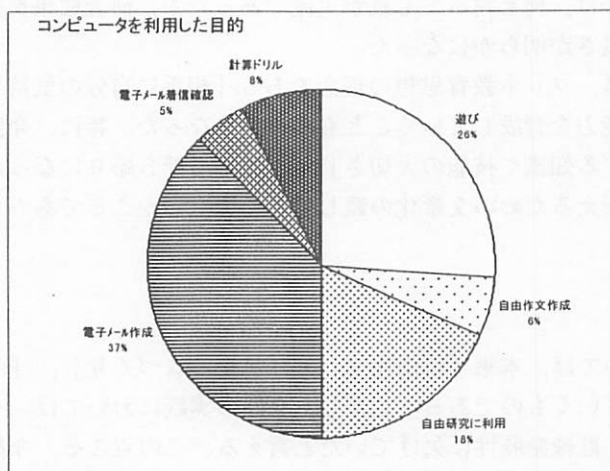
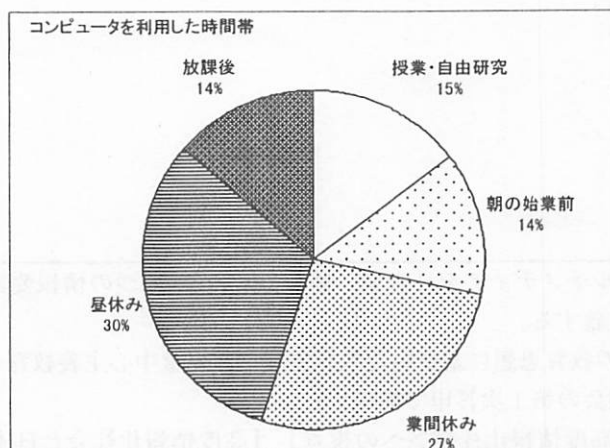


図 13 コンピュータ利用の時間帯目的



3 研究のまとめと今後の課題

(1) 本研究のまとめ

自由作文においては、相手に伝えたいという思いが込められている発表ほど、聞き手の心をとらえることが明らかになった。友だちに知らせたいという切実感が、発表方法の工夫に結びついていたのである。コンピュータのもっている、優れた蓄積性や保存性は、自由作文のホームページ化や電子メール化を容易に実現させて活動を活性化した。

自由研究においては、教師の予想を遙かに超えた子どもたちの発想の豊かさと情報に対する欲求

の強さを実感させられた。書籍や直接取材という、これまでの情報源に加えて、インターネットという強力な道具を手に入れた子どもたちは、多様な情報収集活動を実践したと言える。研究成果をまとめるメディアとしては、何と云っても紙が主流であったが、研究成果を製本して「アルバム」という形にすることの良さが明らかになった。

学校間通信においては、フレネ教育思想の理念である「相手に自分の気持ちを伝えたいという思い」こそが、情報活用能力を育成していくことも明らかになった。特に、今回の実践では、「文章表現能力や読解力に関する知識や技能の大切さ」が、改めて浮き彫りになった。子どもたちは、おそらく「自らの思いを伝えるための文章化の難しさ」を実感したことであろう。

(2) 今後の課題

フレネ教育思想においては、本来「自由作文」, 「アルバムづくり」, 「学校間通信」という活動が連綿と継続発展していくものである。しかし、今回の実践においては、それぞれの活動が独立してしまう傾向にあり、継続発展性に欠けていたと言える。この点こそ、今後における最大の課題である。また、情報倫理教育についても課題が山積している。情報は決して無償で入手できるものではないこと、その情報をつくりあげるために、どれだけの努力や苦労があったのかを指導していく必要がある。容易に情報を入手できてしまう時代が到来した今日だからこそ、情報倫理教育の重要性が高まったのである。

註

- 1) 本論においては、マルチメディアを「音楽、画像、データの3つの情報要素を統合して提供できるメディアの総称」と定義する。
- 2) セレスタン・フレネの教育思想に基づいた教育実践で、児童中心主義教育の一つである。
- 3) 第15期中央教育審議会の第1次答申で提唱
- 4) 濱口恵俊「日本の<高度情報化社会>への視点」『高度情報化社会と日本のゆくえ』濱口恵俊編著,日本放送出版協会,1986,pp.724.
- 5) 見田宗介『現代社会の理論』岩波新書,1996,pp.125-171.
- 6) 里見実『学校を非学校化する』太郎次郎社,1994,pp.100-118.
- 7) 同上,pp.295-304.
- 8) 市川伸一『コンピュータを教育に活かす』勁草書房,1994,pp.125-131.
- 9) 水越敏行「メディアがもたらす教育の質変化とは」水越敏行・佐伯胖編著『変わるメディアと教育のありかた』序章,ミネルヴァ書房,1996,pp.89.
- 10) 黒田卓「インターネットの教育利用」水越敏行監修・菅井勝雄編集,『「メディア」による新しい学習』第1部,4章,明治図書,1995,pp.58-63.
- 11) 里見実『学校を非学校化する』太郎次郎社,1994,pp.62-66.
- 12) 田中仁一郎『教室を変える』青木書店,1993,p.126.

【学会彙報】

(1) 大会関係

第1回大会 平成7年10月28日(土)

- ・講演1 「新しい学力観を踏まえた授業改善の課題と方策」
高久 清吉(常磐大学)
- ・講演2 「生涯学習社会における学校教育観の変革」
真野 宮雄(日本赤十字看護大学)
- ・シンポジウム 「教育に関する実践的研究の充実・向上を図る方策」
吉田 仁(水戸市三の丸小学校)
大山 隆(群馬県総合教育センター)
高野 恒雄(筑波大学名誉教授)
菊池 龍三郎(茨城大学)

第2回大会 平成8年2月10日(土)

- ・講演1 「授業方法の変革—教育工学からのアプローチ—」
小柳 和喜雄(奈良教育大学)
- ・講演2 「学校の再生」
高久 清吉(常磐大学)
- ・児島邦宏教授を囲む鼎談 「これからの学校の在り方」
児島 邦宏(東京学芸大学)
菊池 龍三郎(茨城大学)
本田 和夫(水戸市立千波小学校)

第3回大会 平成8年6月22日(土)

- ・自由研究発表1
「個を生かし、自ら学ぶ意欲を育てる学習の工夫
—複数の教科における『課題設定学習とイメージの地図』の効果的な組み合わせを求めて—」
古谷田 明良(国立科学博物館)
平澤 真澄(千代田町立下稲吉小学校)
大楽 宇子(千代田町立下稲吉小学校)
倉持 久美子(千代田町立下稲吉小学校)
- 「子供に科学の目を育成するために—古河市子供科学教育振興事業の取り組み—」
関口 明(古河市教育委員会)
長浜 良美(県立結城養護学校)
関口 澄子(古河市立古河第一中学校)
濱野 聖一(古河市立古河第二中学校)
勝 文雄(古河市立古河第三中学校)

・自由研究発表2

「明るく楽しい学校生活の実現を目指して

ーいじめ撲滅のために、生活指導主事として、どのように取り組んだかー」

名淵 政義 (常北町立常北中学校)

「生き生きとした学級集団づくりを目指して

ーグループエンカウンターの手法を用いた実践ー」

広原 高志 (石岡市立国府中学校)

・自由研究発表3

「異年齢集団による学校行事の実践」

中川 稔 (美野里町立堅倉小学校)

「勤労体験学習に関する実践的考察ー高等学校における実践を通してー」

森山 賢一 (常磐大学大学院)

「自ら学ぶ力を育てる数学科指導の在り方

ーティームティーチングによる支援と評価の工夫を通してー」

小池 浩一 (水戸市立第一中学校)

梶山 肇 (水戸市立第一中学校)

・シンポジウム 「いじめ問題を掘り下げるー改めて学校、教師の取り組みを考えるー」

諸富 祥彦 (千葉大学)

峯川 一義 (東京都立教育研究所)

飯塚 和夫 (出島村立志士庫小学校)

・総括 「学校におけるいじめ問題対策の重層的課題」

高久 清吉 (常磐大学)

第4回大会 平成8年11月23日(土)

・ワークショップ

「ティームティーチング入門」

コーディネータ 新井 孝喜 (茨城大学)

話題提供者 鈴木 稔 (日立市立久慈小学校)

阿部 和己 (常陸太田市立佐竹小学校)

住谷 佳世子 (水戸市常磐小学校)

山田 宏彦 (水戸市常磐小学校)

「メディア利用入門」

コーディネータ 小柳 和喜雄 (奈良教育大学)

話題提供者 嶋根 由起子 (茨城大学教育学部附属小学校)

長谷川 真人 (茨城大学教育学部附属小学校)

池田 芳一 (牛久市立牛久南中学校)

「環境教育入門」

コーディネータ 大高 泉 (筑波大学)

話題提供者 川島 則夫 (出島村立出島南中学校)

「不登校問題入門」

コーディネータ 生越 達（茨城大学）

話題提供者 橋本 公夫（神栖町立神栖第三中学校）

・シンポジウム 「『生きる力』をはぐくむ学校教育の在り方

－『中教審答申』をどう受け止めるか－

コーディネータ 高久 清吉（常磐大学）

パネリスト 山口 満（筑波大学）

梅原 勤（国立教育会館学校教育研修所）

瀬尾 京子（下妻市立大宝小学校）

第5回大会 平成9年6月28日（土）・29日（日）

・自由研究発表1

「構成的グループ・エンカウンターの『振り返し』場面における受容的態度の在り方
－児童の心の交流の深まりを目指して－

笹本 恵美子（取手市立中小学校）

「ジェンドリンにおける体験過程の研究」

萩谷 孝男（ひたちなか市立勝田第三中学校）

「ピア・カウンセリングの実践的研究」

内田 裕（大洗町立南中学校）

「教育相談の見方・考え方を生かした学級経営の在り方について
－子どもの実態把握の工夫を通して－

西野 敏章（水戸市立双葉台小学校）

・自由研究発表2

「校内におけるコンピュータ利用の推進の工夫」

桧山 雅人（水戸市立笠原中学校）

「コンピュータを利用して主体的な進路選択能力を育てる指導のあり方
－中学校3学年学級活動『進路の選択』の学習を通じて－

澤島 明（日立市立多賀中学校）

石井 克浩（日立市立台原中学校）

小泉 一彦（日立市立日高中学校）

・自由研究発表3

「生徒の数学的な見方や考え方を育てる数学科学習指導の在り方

－中学校3学年学級活動『課題学習』での指導過程における評価と支援の工夫を通して－

高橋 資明（水戸市立見川中学校）

「社会的な事象に興味をもち、自ら進んで調べようとする学習活動の在り方」

関 篤（下館市立下館中学校）

「生徒一人一人の社会的な見方や考え方が深まる社会科学習指導の在り方」

奥谷 克二（竜ヶ崎市立城西中学校）

・シンポジウム 「子どものゆとり・教師のゆとり」

- 基調提案 天笠 茂 (千葉大学)
コーディネータ 海野 千秀 (元水戸市教育長)
パネリスト 天笠 茂 (千葉大学)
小沼 隆 (鉾田町立鉾田南中学校)
川崎 洋子 (下館市立養蚕小学校)

・自由研究発表4

「児童一人一人に自ら学ぶ力が育つ理科学習の指導の在り方

－小学校5学年『物の溶け方』におけるティーム・ティーチングを取り入れた問題解決活動を通して－

黒沢 明良 (つくば市立二の宮小学校)

「一人一人のよさを生かす国語科学習指導の在り方

－思いやりや願いを生かす学習活動の工夫を通して－

小倉 祐一 (明野町立明野中学校)

「自ら学ぶ意欲と力を育てる社会科指導の在り方」

金井 哲哉 (下館市立中小学校)

・自由研究発表5

「保護者の信頼を得る学級経営のあり方－学級通信の効果」

加藤 達哉 (水戸市立寿小学校)

「たくましく生きる力を育む学級経営」

吉野 とし子 (取手市立白山小学校)

「茨城県同和教育担当教員として教師の人権感覚を高めるために

－心理的差別の解決を目指して－

植竹 宏之 (下館市立東部中学校)

・ワークショップ

「ティーム・ティーチング入門」

コーディネータ 新井 孝喜 (茨城大学)

「環境教育入門」

コーディネータ 大高 泉 (筑波大学)

「不登校問題入門」

コーディネータ 生越 達 (茨城大学)

山口 豊一 (茨城県教育研修センター)

「中教審答申検討会」

コーディネータ 高久 清吉 (常磐大学)

(2) 紀要関係

第1号 教育実践学研究 (平成7年3月発行)

「これからの学校像－学校教育の課題を構造的にとらえる－」

高久 清吉 (常磐大学)

「青少年を対象とする生涯学習プログラムの特徴」

金藤 ふゆ子 (常磐大学)

「マルチメディア・インターフェース設計の変化にみる学習論の展開
ーポストモダン思考の学習論の系譜ー」

小柳 和喜雄 (奈良教育大学)

「不登校児童生徒へのかかわりー不適應教室の実践を通してー」

生越 達 (茨城大学)

山口 豊一 (茨城県教育研修センター)

大川 久 (神栖町教育委員会)

橋本 公夫 (神栖町立神栖第三中学校)

「小学校低学年でのパソコン利用について」

嶋根 由起子 (茨城大学教育学部附属小学校)

長谷川 真人 (茨城大学教育学部附属小学校)

「T・Tの効果の実証的研究ー学級T・Tの授業分析を通してー」

鈴木 稔 (日立市立久慈小学校)

「日本における総合学習の歴史的原点ー樋口勘次郎による『飛鳥山遠足』の試みー」

森山 賢一 (常磐大学大学院)

「コンピュータと教育との間で」

池田 芳一 (牛久市立牛久南中学校)

(3) 活動案内

茨城教育実践学会では、平成7年10月の設立以来5回の大会を開催し、会報・紀要（『教育実践学研究』）の定期的な発行を行ってきました。毎回の大会ではシンポジウム、自由研究発表、理事会等が準備され、その内容は会報にまとめられています。また、会報では研究動向等の学会の活動について紹介されるほか、会員には随時大会案内、会員名簿等が送付されます。加えて、大会以外の研究活動として、会員による「教育哲学」研修月例会等が行われています。

学会事務局は、常磐大学高久研究室に置かれ、毎月事務局会議が開かれています。平成10年2月にパンフレット「茨城教育実践学会入会のご案内」を作成、関係機関等に配布しました。

(4) 「教育実践の哲学」研修月例会報告

この研修月例会は、常磐大学高久清吉教授の呼びかけにより、「教育実践上の重要な諸問題についての原理的考察を深め、教育実践の向上と深化を目指す」との趣旨の下、茨城教育実践学会会員で参加を希望する者によって、平成9年2月からスタートしました。以後、毎月第4土曜日の午前10時から常磐大学にて演習形式で続けられており、その会員数は現在30数名となっています。

ここでは、現在の我が国教育界が当面する様々な問題が取り上げられていますが、最近数ヶ月の検討内容は、次の「月例会だより」に述べられているようなものです。

「教育実践の哲学」研修月例会だより No9

(平成9. 12. 4)

11月の月例会は22日、常磐大学で開かれました。まず、県教育研修セミナー指導主事大越福枝さんが、高久教授の著書『教育実践学』や『教育実践の原理』で述べられている「教師の要件」、「本質としての自発性」、「現象としての自発性」、「わかる授業」について、これを自発的に受容するご自身の受け止め方を話題とされました。これらの言葉をわがものとしてこなし切って受け止めようとする姿勢や努力がにじみ出た、そのお話を伺いながら、「自発的受容」とは、正に「主体的受容」であると確認しました。

その後、高久教授は次のようなことを述べました。

「自分の書いたものの中には造語が多い（例えば、「構造的理解」「全心的理解」「自主的自発性」「非自主的自発性」等々）。それは自分の言葉、ひいては自分の思想を述べたいからである。それだけに、自信を感じさせる、説得力十分の文章や語となるが、他方、造語に当たっては、独断や偏見を自戒する必要がある。」

両者のお話の後、会員から様々な感想や意見が出されました。余計な気づかいなしに、自由に活発に自分の感想や意見が述べられる、それが、この研修月例会の大きな特徴の一つとして定着しつつあると思いました。

今回は、去る11月17日に出された教育課程審議会の「中間まとめ」でも大きく取り上げられた「自ら学び、自ら考える力を育成すること」について、高久教授がその見解をまとめて提案したいとのことでした。

12月の月例会は年末27日となりますので休みとし、今回は1月24日、常磐大学（O棟204教室）で開きます。

幹事 森山賢一

No10 (平成10. 1. 30)

1月の月例会は24日、常磐大学で開かれました。

今回は、高久教授が「教育的思考における『矮小化』現象」と題する講義を行いました。予定としては、「自ら学び、自ら考える力を育てる教育」を吟味するはずでしたが、その前に、「矮小化」傾向への反省を取り上げたとのことでした。「自ら学び、自ら考える力」を育てるという、すぐに自ら学ばせる、自ら考えさせる方法技術や現象形式へと関心や考察を小さく限ってしまう教育会の傾向が気になったからとの理由で、「矮小化」問題を取り上げたというわけです。

この「矮小化」現象とは、教育上の問題や事柄について、その理論的背景にさかのぼったり、理論的根拠へと深まろうとする関心や意欲が弱く、ただ現象や形式や方法技術のレベルや範囲でだけ狭く、浅く、小さくとらえる、考える、扱うという傾向であると説明していました。

このような意味での「矮小化」現象への批判、したがって、この傾向からの脱皮を説くことが自分の一貫する基本的な考えであるとして、高久教授は、「自主性」の教育の矮小化、「Why」や「What」の問いを除外して「How」の問いにだけ取り組もうとする実践界の傾向

などを指摘しました。また、最近、教育論文の審査に当たった体験から、おさまりのパターンや枠のようなものにとらわれて小さくこじんまりとまとまった研究論文が多いと話していました。

「矮小化からの脱皮」を図るための根本として、高久教授は、実践家自身の哲学的思考の重要性を強調しています。そのための参考として、池田晶子氏の新聞掲載の論説を紹介したり、「教育の実践界ほど、普遍的理念を踏まえた哲学的思慮が必要などころはない」とのヘルバルトの言葉を、今こそ改めてかみしめる必要があると述べました。

2月の月例会では、高久教授が「自ら学び、自ら考える力を育てる教育」の原理を取り上げるとのことですが、28日、常磐大学（O棟204）で行います。

No 1 1（平成10. 3. 5）

2月の例会は28日、常磐大学で開かれました。

ご承知のように、特に平成8年の中教審第1次答申以来、「知識を一方向的に教え込むことになりがちであった教育から、子どもたちが自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す」ことが、我国の教育、とりわけ学校教育の基本的な課題として掲げられています。当然、平成9年11月に出された教育課程審議会の「中間まとめ」でも「自ら学び、自ら考える力を育成すること」が教育の基調を転換する」ことであるとして改めて大きく取り上げられています。

高久教授は、「このような『教育の転換』は、審議会の主張をただ受け入れるだけで実現できるものではない。これを主体的に受け止め、展開してためには、我国の教育界、したがって、教育関係者がこの『転換』の理由や内容や方法について、しっかりと理論武装をすることが必要である。これなしには、『転換』は掛け声だおれになる」として「自ら学び、自ら考える力」を育てる教育についての教授学的考察の重要不可欠なことを強調しています。

このような考察の第1回として、今回は、「自ら学び、考える力」が学力の全体構造から見て中核的なものであることを明らかにし、また、「実質陶冶」と「形式陶冶」というドイツ教授学の中心問題の論議の歴史を踏まえながら、「学習内容の習得」と「自ら学ぶ意欲・能力・方法の習得」との関係を引き彫りにしました。

この関係については、次回、「学習の過程を大切にすること」を接点に据えて、さらに深く掘り下げていくとのことでした。

その次回は3月28日、常磐大学（O棟204）で開きます。年度末、何かとご多忙を極める時期かと思いますが、一人でも多くの会員の皆さんと、教育について静かに深く考えるひと時を共有したいと念じています。

No 1 2（平成10. 4. 7）

3月の月例会は28日、常磐大学で開かれました。

前回に続き、「自ら学び、自ら考える力」の教育について高久教授の理論提示が行われました。今回は「自ら学び、自ら考える力」を育てる授業・学習の方法上の中心問題として、「学習の過程を大切にすること」が取り上げられました。

この「過程の重視」は、中教審第一次答申でも、学習指導の方法を述べるところで（第3部第

1章、第4章)、繰り返し強調されています。しかし、高久教授は、その記述が断片的なものにとどまるとして、「学習の過程を大切にすることの意味や方法に関し、もっと筋道の立った体系的な考察・理解が必要かつ重要であると力説しています。

この問題について、教授自身は次のように吟味を進めています。それは一方、昭和20年代の我が国の新教育運動における教授改革のモットーとなった「過程を大切にする授業！」の理論と実践の反省、他方、ドイツ教授学の歴史を貫く「実質陶冶」と「形式陶冶」との関係についての論議—この二つを踏まえて、児童生徒の本来の自己活動を触発し、助長し、方向づけるような「学習過程」の在り方についての考察を進めました。要するに、児童生徒の自己活動を通し、「あたかもはじめて見つけた（創り出した）かのようにして」、目指す知識や技能を習得する過程をたどることが、内容の習得を効果的にすると同時に、これが自ら学び、自ら考える力を育てる最善の方途であるということです。

この問題は、これから、この月例会でも、そのつど具体的に論議されることになるだろうと思います。

さて、今回は、今回話題となった「自己活動」の深まりという問題と関連し、森山賢一が「体験の深まり」について、また後藤卓也会員が「いま、中学校は…」というテーマで話題提供をすることになっています。今回と同じ常磐大学O棟204教室で4月25日午前10時から開催いたします。

No13 (平成10.5.7)

4月の例会は25日、多数の会員参加により常磐大学で開かれました。

まず森山賢一が「体験の深まり」の問題を中心に発表をしました。第15期中教審第一次答申で、「体験は、子供たちの成長の糧であり、〔生きる力〕をはぐくむ基盤となっているのである」と述べていますが、現在、「体験」は極めて重要な方法原理として強調されています。しかし、現在に限らず、「体験」の原理は明治以来、とりわけ大正期新教育運動以来、一貫して、代表的な方法原理の一つと見なされています。

この体験重視の歴史的考察を通し、森山は、特に「体験の深まり」に注目しています。この「内的体験」にこそ、体験の教育的価値の本質があるということです。このことをケルシェンシュタイナーの「即事性（合則性）」やエッガースドルファーの「自発的受容」の概念を手がかりに掘り下げました。

次に、那珂二中の後藤卓也会員が「今、中学校で」というテーマで発表を行いました。昨年4月、中2生115名を対象に行った「興味・欲求・悩み調査」、平成9年度卒業生94名を対象とした「進路に関する調査」の結果を踏まえて、中学生の意識の解明に迫りました。

5月の月例会は23日、常磐大学で開きます。県教育研修センター大川久指導主事の話提供を予定しています。

尚、前回話題となりました懇談会については、後日詳細なご案内をお送りさせていただきます。